

長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書
(I)

1977

新潟県教育委員会

長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書

[I]

1977

新潟県教育委員会

序

昭和49年に「ニュータウン」基本構想を発表した長岡市は、関越・北陸両自動車道及び上越新幹線の建設とあいまって、新潟県中越地方の経済・社会・文化等の中心都市に発展しようとしています。

このニュータウンの建設にあたり、土地利用の基本方針として自然環境との調和、文化財の保護、周辺地域との関連等に十分配慮することがあげられています。

新潟県教育委員会は、ニュータウン建設区域の埋蔵文化財の保護をはかるために、昭和51年度に遺跡分布調査を実施しました。本書はその報告書であります。

終りに、本調査に参加された調査員各位はもとより、御協力いただいた地元の方々及び長岡市教育委員会に対し、また、計画から実施に至るまで格別の御配慮を賜った地域振興整備公団、長岡市企画開発部長岡ニュータウン対策課の方々に対し、ここに深甚なる謝意を表します。

昭和52年3月

新潟県教育委員会

教育長 厚 地 武

例　　言

1. 本書は、地域振興整備公団から新潟県が委託を受け、県教育委員会が昭和51年度に実施した長岡ニュータウン建設区域一雲出地区・中央地区一の遺跡分布調査の報告書である。
2. 遺跡の写真撮影・略測は各調査員があたり、遺物の拓本・写真撮影及び挿図・図版の作成は金子拓男・千葉英一があたった。
3. 本報告書は各調査員が分担執筆したもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
4. 調査にあたり、参加者各位並びに地元のあたたかい御支援と御協力を賜った。また、地域振興整備公団長岡都市開発事務所、長岡市企画開発部長岡ニュータウン対策課から種々の御配慮を賜ったことを記して謝意を表したい。
5. 長岡市立宮本中学校教諭の多々静治氏から観音山遺跡採集の資料を提供していただいた。記して謝意を表したい。

目 次

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1

II 遺 跡

1. 地形の概要	3
2. 各遺跡の概要	
1 岩野城跡	5
2 座禪塚	6
3 寺田遺跡	7
4 観音山遺跡	8
5 城扣遺跡	9
6 蛇山7号塚	11
7 蛇山10号塚	11
8 薬師堂の塚	11
9 薬師堂跡	11
10 中山1号塚	12
11 中山2号塚	12
12・13 中山3・4号塚	12
14 中山5号塚	13
15 中山6号塚	13
16 丸山城跡	14
17 鷹射山城跡	15
18 片刈城跡	16
19 寺屋敷遺跡	18
20・21 米山塔・月待塔	18
22・23 地蔵尊	19
引用参考文献	20

挿 図 目 次

第1-1図 中越地域の地形図	3
第1-2図 ニュータウン区域周辺の地形	4
第2図 岩野城跡略測図	5
第3図 寺田遺跡地形図	7
第4図 観音山遺跡地形図	8
第5図 観音山遺跡採集土器拓本図	9
第6図 城扣遺跡地形図	9
第7図 城扣遺跡採集土器拓本図	10
第8図 丸山城跡略測図	14
第9図 鷹射山城跡略測図	15
第10図 片刈城跡略測図	17
第11図 遺跡位置図	折り込み

図 版 目 次

図版I	岩野城跡
図版II	岩野城跡
図版III	座禅塚
図版IV	観音山遺跡、寺田遺跡
図版V	城扣遺跡
図版VI	蛇山7号塚、蛇山10号塚、薬師堂の塚
図版VII	中山1号塚、中山2号塚、中山3号塚
図版VIII	中山4号塚、中山5号塚
図版IX	鷹射山城跡
図版X	片刈城跡
図版XI	片刈城跡
図版XII	片刈城跡
図版XIII	米山塔、月待塔、地蔵尊
図版XIV	観音山遺跡・城扣遺跡採集資料

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

長岡ニュータウンの建設は、地方都市の新しい都市発展の動きとして注目されるものであり、地域振興整備公団が設置され、その地方都市開発整備部門が最初に手掛ける事業である。本事業は同公団から昭和50年7月に関係省庁に対して事業要請がなされ、同年11月19日国土庁長官および建設大臣から事業認可があり、同年12月3日長岡都市開発事務所が開設されて建設への具体的な動きがみられるに至った。

この長岡ニュータウン建設については、昭和47年10月長岡市長小林孝平氏が第34回全国都市問題会議の席上「長岡市の将来構想」との講演の中でその考えを示唆したのに始まる。その後計画は進み、昭和49年8月20日、公団の平田敬一郎総裁が現地視察をしたが、その折長岡ニュータウンを公団事業として採択する意向を表示した後、昭和49年10月12日に新潟県知事および長岡市長が公団に対して調査要請をした。このようなことから、県市共にその協力体制を整えると共に、市では長岡ニュータウン企画室をもうけるに至った。

公団ではまず開発対象区域を設定して基礎資料を得るべく調査を開始した。そのうち、動物・植物・文化財については昭和49年11月11日に長岡市に対して調査依頼し、同年市はその報告を公団におこなった（地域振興整備公団1975）。この内、埋蔵文化財については、調査期日の関係から現地踏査を欠いたものとなり、既存のデータをまとめあげたものであった。このため公団では埋蔵文化財について徹底を期すべく、昭和50年3月19日新潟県教育委員会に対して〈埋蔵文化財の保護を計るために、昭和50年度に長岡ニュータウン用地内の埋蔵文化財包蔵地等の確認調査を実施してほしい〉との要請をしてきた。

この要請をうけた県教育委員会では、長岡市教育委員会と協議を重ねた。その結果、長岡ニュータウン建設計画地域内の遺跡分布調査および遺跡確認調査は新潟県教育委員会が公団の委託により昭和51年度に実施することとし、長岡市教育委員会では同開発に対処するため専門職員を配置することになり、とりあえず県教育委員会がおこなう遺跡分布確認調査に全面的に協力することになった。

このような前提から、県教育委員会では市教育委員会と協議を重ね、昭和51年度実施の調査体制や計画を作成すると同時に、公団と最終協議を昭和51年6月17日新潟市においておこない、昭和51年7月12日付地域振興整備公団長岡都市開発事務所長馬場和秋が委託者、新潟県知事君健男が受託者となり、遺跡分布・確認調査に関する委託契約に調印した。

（金子 拓男）

2 調査の経過

今回の委託契約による分布調査の対象地区・面積は、雲出地区70ha、中央第1地区140ha、中央第2地区310haで総面積1,000haのうち520haである。調査には県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員、長岡市教育委員会社会教育課職員および県内考古学・郷土史研究者があたり、案内・伐採等の作業には地元の雲出・白鳥・宮本東方・大積町一丁目・高頭・福田各地区の有志の協力を得ることができた。調査期日については面積・植生等の関係から次のとおりである。

予備調査 7月13～15日、20～22日

第1次集中調査 9月27日～10月2日

確認調査 10月12～16日，18・19日，25～30日

第2次集中調査 11月8～13日

予備調査ではニュータウン区域の境界および今後の調査のためのルートを確認するとともに、周知の遺跡〈岩野城跡、片刈城跡、高寺城跡（六座神社）、蛇山7号塚（玉池の塚）、城扣遺跡〉の所在を確認した（高頭の城扣館跡については不明）。また区域のなかで最も緊急を要する「緊急度1」地域（52ha）を対象に調査した。この地域には、蛇山7号塚、城扣遺跡、観音山遺跡が含まれている。

第1次集中調査では3班の調査班を編成し、1班は雲出地区、他の2班は中央地区で笹川を境に東西にわかれぞれ調査を実施するとともに地元での聞き込みをおこなった。

確認調査では周知の遺跡および新発見の遺跡での伐採作業の後、略測・写真撮影・試掘をおこなった。しかし一部の遺跡は用地買収が難航していたため伐採・試掘ができず、十分な確認調査ができなかったことを付記しておく。

第2次集中調査では3班とも中央地区に入り、第1次の未調査区域および既調査区域でも再度必要と思われるところを対象とした。また発見された遺跡（とくに塚・寺院跡）の伝承や由来を、更に、沢・丘陵などの通称について徹底的な聞き込みをおこなった。最終日に報告会を開き、各調査班から成果・反省等の事項について報告がなされた。金子・千葉は公團長岡都市開発事務所に現地調査の終了を報告するとともに、所在遺跡の地番確認をおこなった。

調査体制は次のとおりである。

（千葉 英一）

調査員 安達吉治

石沢寅二（県文化財保護指導委員、津南町文化財調査審議委員）

室岡 博（県文化財保護指導委員、柿崎町・中郷村・名立町文化財調査審議委員）

山口栄一（県文化財保護指導委員、巻郷土資料館審議委員）

山崎弥作（県文化財保護指導委員、与板町文化財調査審議委員）

荒木英策（長岡市教育委員会社会教育課庶務係長）

駒形敏朗（長岡市教育委員会社会教育課学芸員）

寺崎裕助（長岡市教育委員会社会教育課学芸員）

金子拓男（県教育庁文化行政課文化財主事）

戸根与八郎（県教育庁文化行政課学芸員）

千葉英一（県教育庁文化行政課学芸員）

家田順一郎（県教育庁文化行政課嘱託）

高橋陽子（県教育庁文化行政課嘱託）

作業員 長岡市雲出町・白鳥町・宮本東方町・大積町一丁目・高頭町・福田町の有志

事務局 福島寅嘉（県教育庁文化行政課長）

谷沢 嶽（県教育庁文化行政課長補佐）

江坂 勇（県教育庁文化行政課管理係長）

竹田良性（県教育庁文化行政課主事）

II 遺 跡

1. 地 形 の 概 要 (第1-1図, 第1-2図)

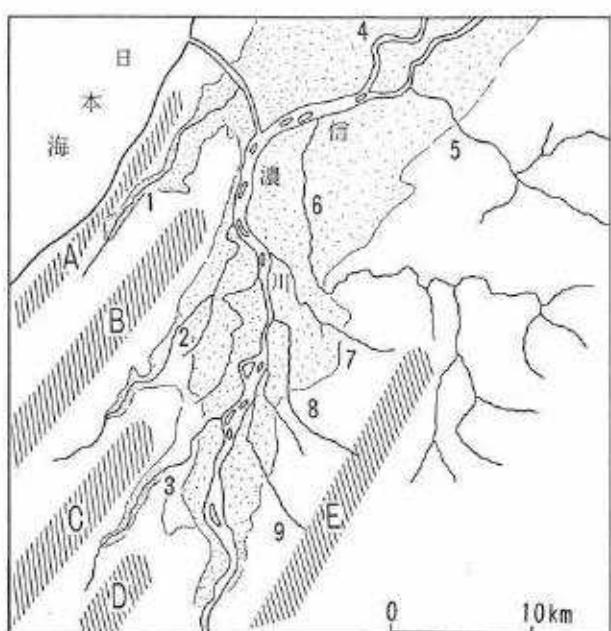
長岡市は新潟県のほぼ中央に位置する。市域の中央部を大河信濃川が北流し、東側は比較的急峻な東山連峰に、西側は比較的なだらかな西山連峰に囲まれており、これらの山裾には洪積世の河岸段丘が発達している。市域の中央部には信濃川によって形成された沖積地が広がっているが、これは地形的には南部の扇状地形の中越平野と、北部の三角州の下越平野（蒲原平野）とにわけられる。

長岡ニュータウンの建設地域は市の西方、関原町一丁目、関原町二丁目、高頭町、宮本町一丁目、宮本東方町、大積町一丁目、親沢町、深沢町の各一部（以上中央地区）および雲出町、宮本町三丁目の各一部（以上雲出地区）にわたる面積約1,000haで、ニュータウンの南は三島郡越路町と境界を接している。

新潟県の中部地域には第三紀の地層で構成される褶曲構造の丘陵が形成されており、信濃川の西には東頬城丘陵が走っている。この丘陵は北北東—南南西方向の背斜構造よりなるが、さらにいくつかの雁行する背斜群からなっており、それらは北（日本海側）から、西山丘陵、曾地丘陵（曾地峠—地蔵峠—薬師峠—小木ノ峠）、八石丘陵（八石山—塚山峠—柳形山）、関田丘陵（天水山—有倉山—向山—小国峠—阿藏平）と呼称されている。そしてこれらのあいだには島崎川、黒川、渋海川などの河川が流れている。長岡ニュータウン区域の中央地区は、このなかの八石丘陵の末端に、雲出地区は曾地丘陵の支陵の末端にあたり、その標高は約50m～230mである。また区域内には谷川、笹川、河久保川をはじめ数多くの小河川が存在するが、大部分は黒川に流れ込み、一部は渋海川に流入している。そして両河川は信濃川に併呑されているのである。

台地については、八石丘陵下の関原台地と曾地丘陵下の三島台地とにわけられ、とりわけ関原台地には縄文時代中期の馬高遺跡、転堂遺跡、後期の三十稻場遺跡、岩野原遺跡、晩期の藤橋遺跡、尾立遺跡などが立地するが、ニュータウン区域内にはこれらの台地はごくわずかしか含まれていない。このことは区域内に所在する遺跡の種類において、遺物包含地が少なく（あっても小規模）、塚・山城が多いという調査結果と密接に関連していると考えられる。

（千葉 英一）



第1-1図 中越地域の地形図

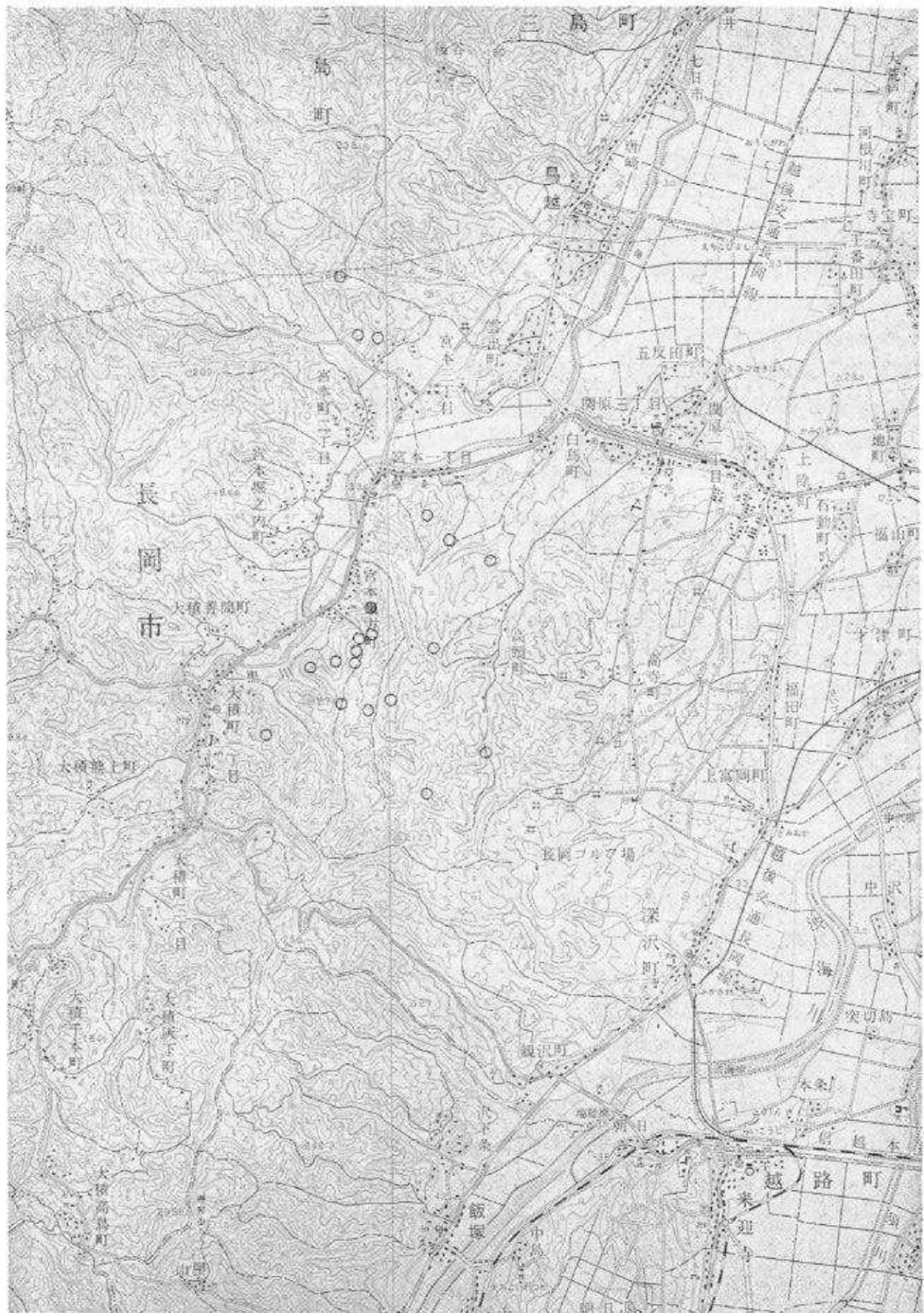
A 西山丘陵 B 曾地丘陵 C 八石丘陵

D 関田丘陵 E 魚沼丘陵

1 島崎川 2 黒川 3 渋海川

4 中之口川 5 五十嵐川 6 刈谷田川

7 猿橋川 8 栖吉川 9 太田川



第1—2図 ニュータウン区域周辺の地形
(国土地理院「柏崎」「長岡」1:50,000原図 昭和48年発行)

1 : 50000

2. 各遺跡の概要

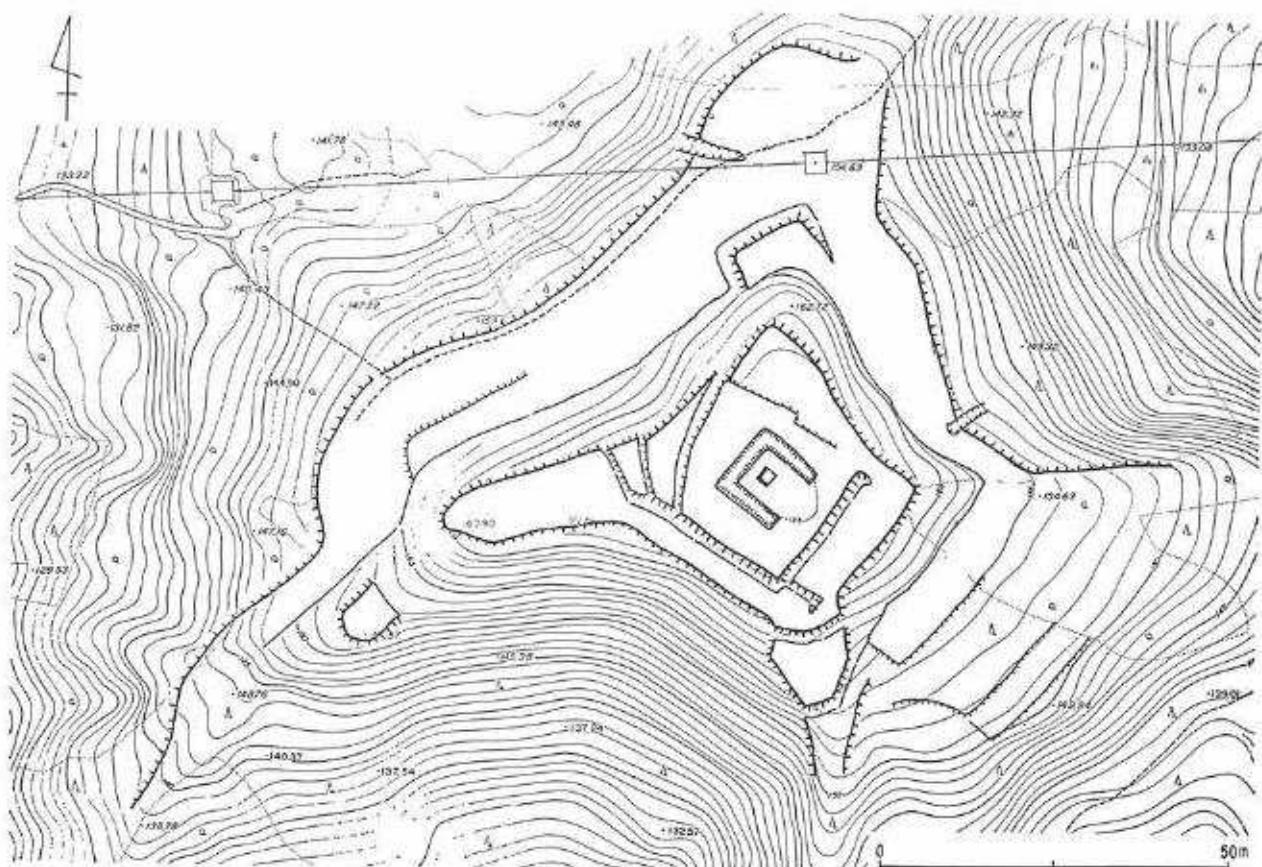
1. 岩野城跡(第2図、図版I・II)

所在地 雲出町水梨3400~3412番地、3416~3417番地他

岩野城跡は上記地籍、標高165mにある山城である。この山城は標高200~350m前後の地蔵峠・二田城跡・薬師峠・中山城跡・小木ノ城跡の山嶺を連ねる曾地丘陵の低い分水嶺に位置している。曾地峠、小黒須、鷹ノ巣などの多くの山ひだの細流を集めて東北に流れる黒川は上流地域を蛇行し、大積・宮本などの集落に狭間的な細い沖積地をつくりながら、曾地丘陵の東縁に沿って関原、三島町を貫流し、与板町の北域に達して信濃川に合流している。道路は山麓西に林道芝峠・中山線、南に県道長岡・西山線、東に町道鳥越・宮本線が走っている。

城跡に至るには国道8号線宮本町一丁目の長岡市役所宮本連絡所前より黒川に架かる新保橋を渡り、河久保川の鳥居橋を渡ると宮本三丁目岩野集落に突き当り、集落を横断する県道長岡・西山線を跨いで行くと、山麓の和貴泉酒造の前に出る。山沿いの村道を右に行くと下屋敷と呼ばれる丘陵に畠が広がっており、ここからゆるやかな山林内の道を登ると両側の谷は、以前は田園であったが、今は葭や葦の繁った湿地になっており、このあたりは城ノ谷と呼ばれている。山頂近くに平地があり、黄蓮が群生している。背面から山頂に登る道があり、ここに鉄塔があって送電線が架かっている。頂上中央に石祠がある。城跡からの展望はよく、中山城跡を望むことができる。

城跡は単郭の簡単な構造である。山頂(主郭)の中央に烽台と考えられる縦横4m位のコの字形の土壙がある。周囲は長さ30m、幅30m位で削平されており、一段下って幅5m位の曲輪があり西方へ細長く突き出ている。南方下方



第2図 岩野城跡略測図

に空壕がある。南北は急崖であるが、北側では6m程下ったところは平坦で曲輪になっている。東北側はゆるやかな傾斜で〈城ノ谷〉に連なっている。

岩野城は〈水梨城〉とも称され、室町時代末期（越後上杉期）のもので加藤左京大夫、黒川備前等の居城と伝えられている。本城跡より指呼の間に中山城、堀之内城、二田城、小木ノ城があり、西宮本城、五庵谷城、物見山砦、善間城、三丁田城、御堂山城、コ城、桟形城、鷹射山城、片刈城、高寺城の山城が周辺に壘集している。伝承では岩野城は中山城の出城で、中山城は二田城の出城といわれている。あるいは室町期に中越地方に勢力を振った小木ノ城主の勢力下にあったとも推定され、非常の場合に烽台からの裡が小木ノ城、中山城、二田城に急を知らせたとも考えられる。東南の山麓の通称原といわれている地域に〈館〉と称するところがあり、堀（幅8m）と土塁（高さ2m）、清水、井戸、池等が現存しており、館の遺構が居たと伝承されている。城の登り口一帯を下屋敷と呼び、鍛冶屋敷の地名もある。現在埋立てられて畠になっているが〈ナタ池〉と称する池があり、鍛冶場があったといわれ鐵屑と古銭が出土したことである。下屋敷からは中世陶器が表採されている。館付近に由緒不明な阿弥陀堂がある。岩野城とこれら山麓の遺跡等との関連については今後の調査により明確にしたい。

（山崎 劣作）

2. 座 禅 塚（図版III）

曾地丘陵の東丘陵下を流れる黒川ぞいの台地では、数多くの塚が分布することは『温古の采』などにも記載され古くから著名であるが、今回の分布調査でも多数の塚の分布地点が確認されている。なかでも曾地丘陵の南に位置し、独立丘陵を呈する雲出丘陵台地（三島台地の一部）では、西田の〈大塚〉をはじめ11基の所在地点が再確認されている。座禅塚は今回の調査によって新しく発見された塚で、雲出町水梨3290番地に所在する。

曾地丘陵は丘陵の東南を流れる黒川に向けて多岐の舌状台地を突出させ、その山麓には高標にて広大な扇状台地を形成し、原などと呼称される平坦な台地をくり広げ、台地上には集落や畠地、疎林などが所在する。また台地の周辺には湧水地点がところどころに観察される。本塚付近の宮本町三丁目集落はこの扇状台地の西南端に位置し、南面は関原段丘に相対し、黒川の流れに向けて水田が拓かれている。また県道長岡・西山線が集落を通過し、北東は宇板・寺泊方面に至り、北西は曾地丘陵上の薬師峠を越えて出雲崎につながる交通の恵まれた地点に所在する。この街道上の山頂には中世の山城が点在することから想定して、中世から近世初頭にかけてかなり重要な交通路であったと考察される。座禅塚はこの集落の西端に突出する舌状台地上に立地する。この台地は先端を走る県道長岡・西山線付近から比高60m地点まで緩やかな斜面が続き、畠地などが拓かれているが、急に屹立して断崖上の急斜面を形成し、比高90m地点に到達すると狭い平坦部がある。西側には深く潜入する山峡があり、そこには峡田が拓かれ、寺田と称されている。東南は守門岳、魚沼三山などが眺望される。また尾根ぞいにひらかれた山道は、塚の据廻りを通り北側の山頂に位置する岩野城跡主郭まで続く。

本塚は一辺約5.5m、高さ1.6mの方形塚で周溝が回撓する。ただ残念なことは、南側据部が一部損壊している。構築年代や目的・性格については不明である。分布調査や聞き込みによる伝承調査等によって知り得たことは次のとおりである。

- ① 方形塚で周溝を有し、単基で所在する。
- ② 周辺地域に分布する塚はその名称が失われているが、座禅塚は今でも名称が保たれている。
- ③ この周辺の塚は六十六部により構築されたとの伝承が地域の人々に信じられている（座禅塚もそうであると明言はできないが、一応可能性はあると思われる）。

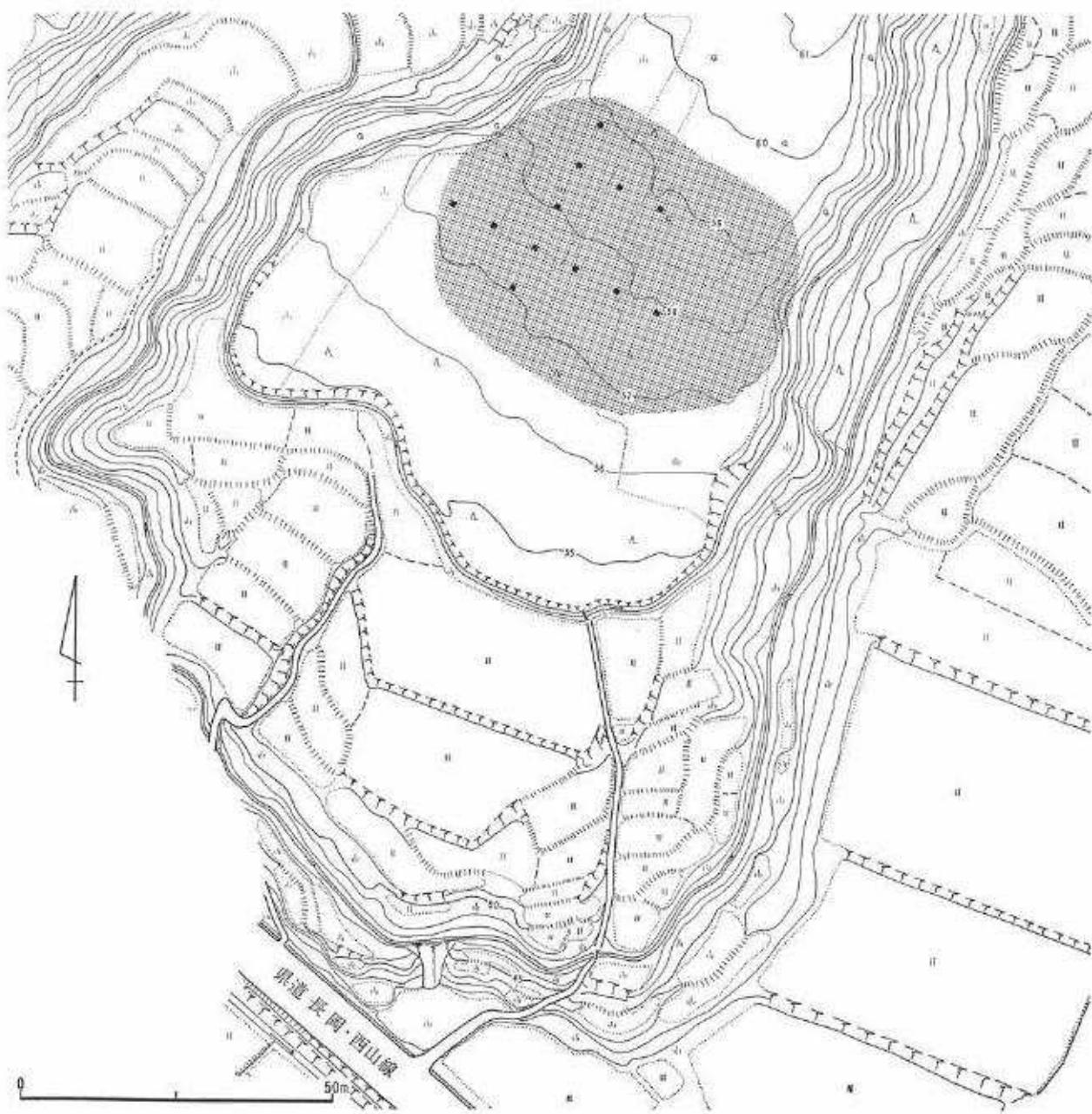
以上を記して、今後の塚の総合調査に期待したい。

（山口 第一）

3. 寺田遺跡(第3図、図版IV)

所在地 雲出町水梨3370-1番地, 3371-2番地, 3373番地他

本遺跡は岩野城跡から南にのびた尾根の末端が舌状に突出した丘陵上に立地し、その標高は58m前後、平地部と水田面との比高は約20mである。この舌状台地の先端部は水田で、その奥は畑(桐、杉)・荒地となっている。予備調査の際に杉畑から土器の細片が数点採集され、確認調査の際には須恵器大甕の胴部破片—外面に平行叩目文、内面に青海波文—が採集されている。試掘ピットの土層観察では、厚さ10~25cmの表土(褐色土層)のすぐ下位に地山と思われる明黄褐色粘土層があらわれ、遺物包含層はみられず、また遺物も出土していない。表土には黄褐色粘土が混在しており、耕作によるかなりの乱れが認められる。このようなことから遺跡の範囲を明確におさえることはできないが、一応遺物が表採された畑を中心に、荒地の一部を範囲としておさえておきたい。



第3図 寺田遺跡地形図

遺跡の時代、時期については、土器片は縄文土器の可能性はあるが、いずれも細片で風化が著しいため判断することができないので、須恵器片をもって奈良～平安時代と考えておきたい。

(千葉 英一)

4. 観音山遺跡(第4・5図、図版IV・XIV)

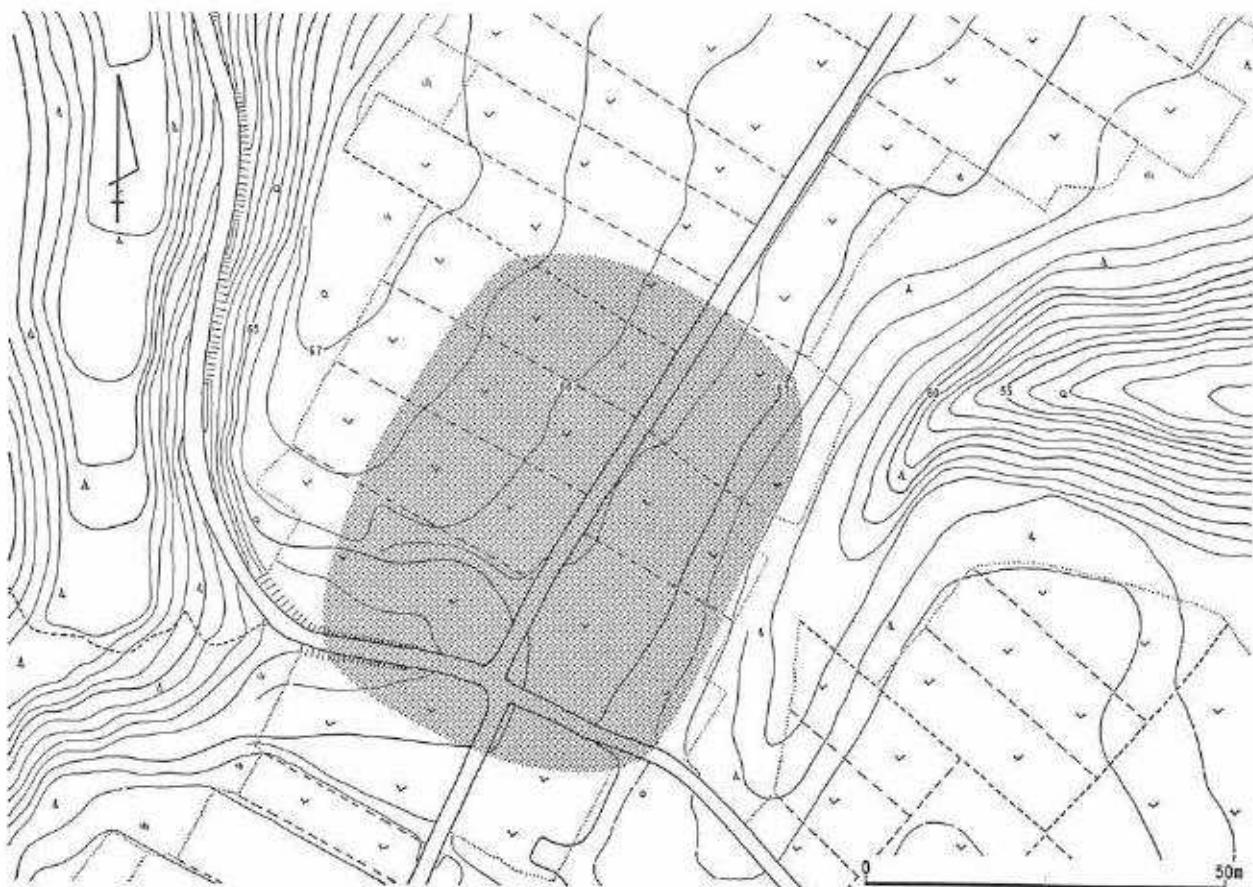
所在地 宮本町一丁目東甲233-11～233-16番地

本遺跡は遺物包含地であり、長岡市西部に広がる関原丘陵の北西側先端部分に立地する。標高約65mを測り、北側の沖積面には黒川が流れ、南には片刈城跡が遠望される。

遺跡は東西2つの小支谷によって形成された舌状台地基部の南東斜面上に位置し、付近一帯は現在畠地となっているが、南側斜面上には県営宮本原種苗畠が営まれている。昭和48年に南北約60m、東西約30mの範囲において縄文土器片10数点が、宮本中学校教諭多々静治氏によって採集されており、今回の調査では資料を得ることができなかつたので氏の資料を使用させていただいた(第5図)。

1は深鉢形土器の口縁部破片であり、口縁部を一周する直線及び矢羽根状の文様がともに沈線によって描かれている。色調は明褐色を呈し焼成は良好である。2は平行沈線文が施されている深鉢形土器の胴部破片である。色調は暗褐色を呈し、焼成は不良であり、胎土中に石粒(石英?)を含んでいる。3～5は無文の深鉢形土器の胴部破片であり、色調はともに褐色を呈する。これらの土器片は1の文様から推定して中期後半～後期初頭の所産であろうと考えられる。したがって本遺跡もおよそこの時期に属すると思われる。

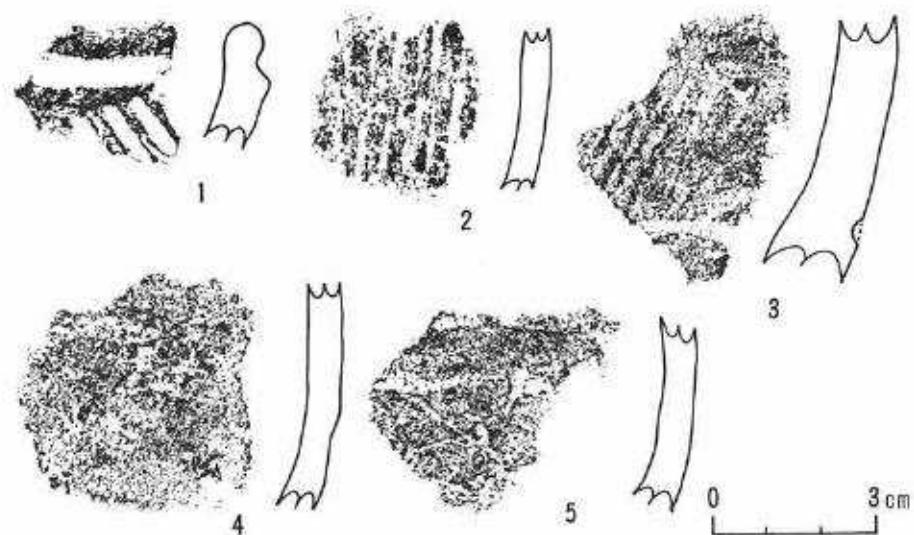
今回の調査では前述したように遺物は採集されず、また畠のため試掘もできなかつた。地表観察によれば、表土層にはかなりの量の地山層が混入しており、遺跡自体畠作等の耕作によってかなりの改変がなされていると考えられ、



第4図 観音山遺跡地形図

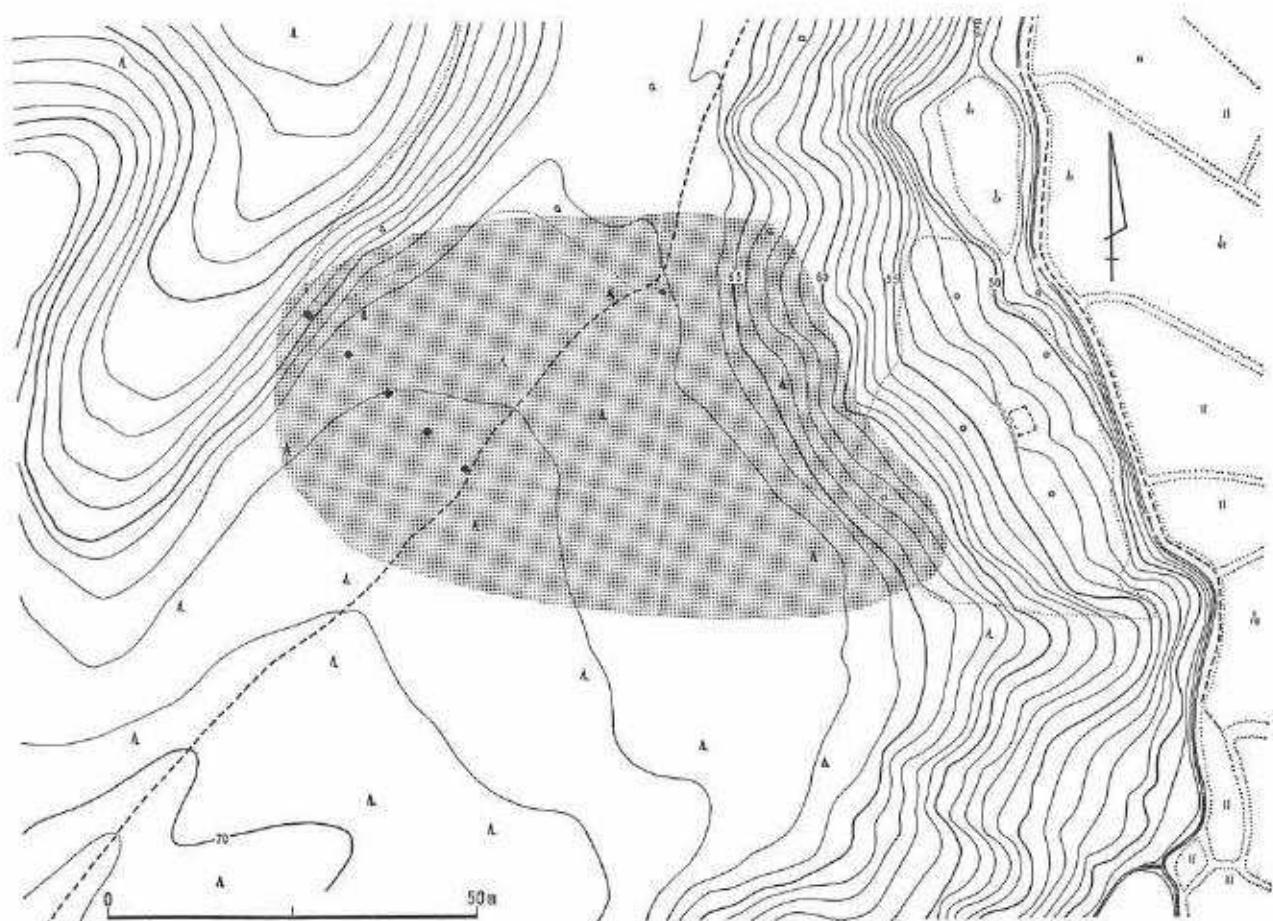
試掘による確認が必要と思われる。

(寺崎 裕助)



第5図 観音山遺跡採集土器拓本図

5. 城扣遺跡 (第6・7図、図版V・XIV)



第6図 城扣遺跡地形図

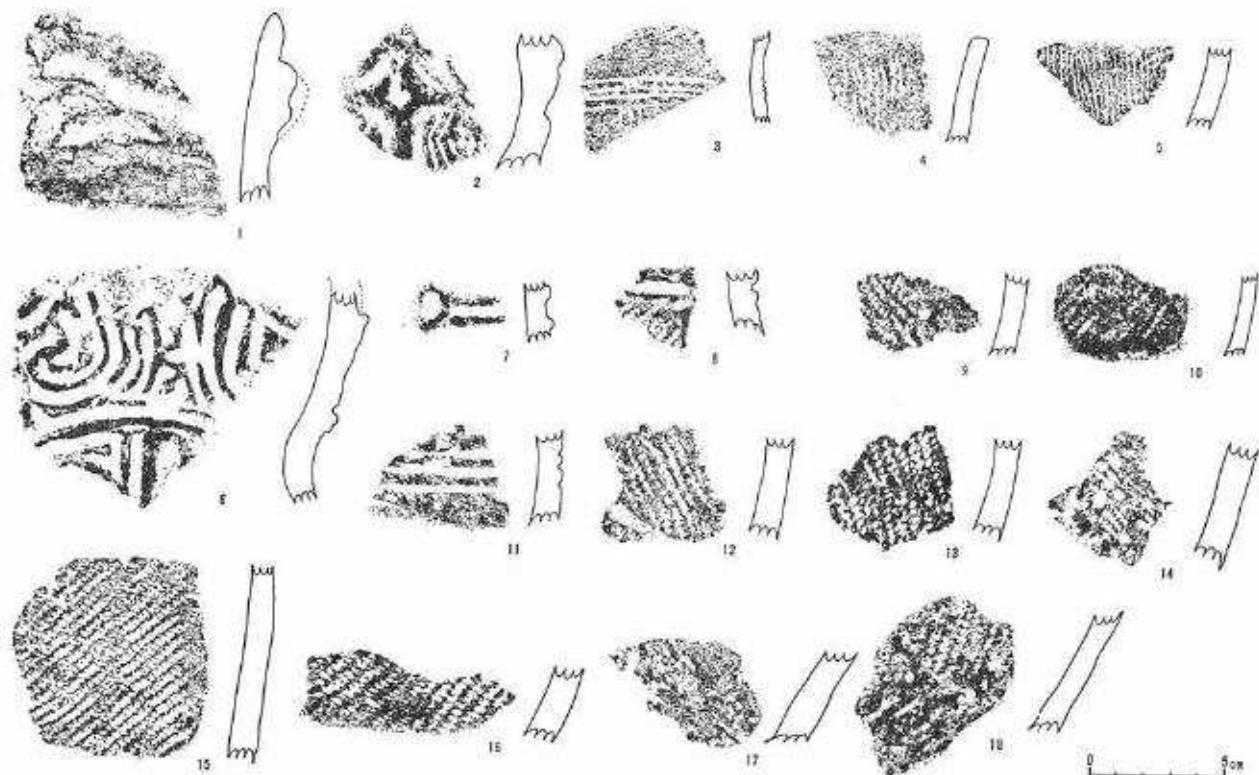
所在地 宮本東方町蛇山3026番地, 3027-31~33番地, 3027-38・39番地他

八石丘陵の末端に位置する糠山（標高102m）の丘陵の北～東には、馬高・三十稻場などの大遺跡が立地する広大な閑原台地が広がっている。本遺跡は、糠山の西を北流している谷川をはさんで並走している。突出した丘陵の平坦部に立地しており、標高は65m前後。水田面との比高は約20mであり、現状は山林である。また三十稻場遺跡とは600m、馬高遺跡とは1,000mの距離である。なお本遺跡は昭和19年の大水害による崖崩れの際に発見された周知の遺跡で、縄文中期後半の馬高式土器をはじめ石器などが平箱一枚ほど長岡市立科学博物館に所蔵・保管されている（中村1966、新潟県教育委員会1967、同1975）。

遺跡の範囲（第6図）については、予備調査の際に東側斜面一桐畠で段切りされている一から、確認調査の際には西側斜面の崩壊部分から縄文土器・磨製石斧が採集され、東西の範囲は確定したもの、南側は未買取地域なので推定によるものである。部分的な試掘の結果、厚さ10~20cmの黒褐色を呈する腐植土の下に茶褐色土層があり、この層から縄文土器、円礫が出土している。この層の厚さは15~25cmで、遺物包含状況は良好である。この下に地山と思われるやや赤味がかった黄褐色粘土層がある。一部の試掘ピットでは、腐植土と茶褐色土層との間に5~10cmほどの漸移的色調を呈する褐色土層が観察されている。採集・出土した土器（第7図・図版XIV）はいわゆる馬高式土器の破片（6）をはじめ、中期後半の特徴をそなえており、4・5の撚糸文が施されている資料もこの時期のものと考えられ、時期的に大きな幅はないと思われる。遺跡の性格について明言することはもちろん不可能であるが、立地・規模からみて大集落跡である馬高遺跡との関連で考える必要があろう。

本遺跡名はこのあたりに片刈城の扣城一城扣館一があったと推定されていることによる。今回の調査では確かに平坦部はあるが、人為的に削平されたとは考えられず、また地表遺構も発見されなかつたので、「城扣館」の所在について否定的であることを付記しておく。

（千葉 美一）



第7図 城扣遺跡採集土器拓本図

6. 蛇山7号塚（図版VI）

本塚は宮本町一丁目蛇山甲298番地の^北に所在し、標高は約68mである。東北方前面低地は標高差3m余にて昭和51年完工の蛇山畠地整備地区を通じて国道8号線バイパスに面し、背面は緩傾斜にて蛇山10号塚、片刈城跡のある高地に連なり、隣地は県営宮本原種苗畠にて、杉の疎林中の緩斜面上にある平凡な塚である。本塚の形態は方形であり、一边約2.5m、高さ0.4mである。〈玉池の塚〉と称するが、伝承・伝説については皆無で、造塚目的及び年代については不明である。

（石沢 寅二）

7. 蛇山10号塚（図版VI）

本塚は宮本東方町蛇山3006—2番地に所在する。八石丘陵の末端近く、通称大山または鏡山（標高212m）付近で分岐した丘陵は、片刈城跡をへて蛇山地区へねかけるが、本塚はこの分岐した丘陵のほぼ中央、標高130mの頂部に立地する。名称については、蛇山地区にはすでに9基の塚が発見されて一連番号が付されている（金子拓男・和田寿久1976），通称のない本塚はそれを踏襲した。形態は方形にて、底辺5.5m、頂辺1.5m、高さ1.1mであり、盗掘の痕跡もなく形態が整っており、保存状態はきわめて良好な塚である。付近に石造物、周溝は認められず、また伝承もなく、長い間山林中にひっそりと埋れていたものであろう。

本塚は盛り土のみにて造塚目的・時代について不明ではあるが、占地が景勝の高所で、旧笹川郷の直上であり、また山道に面していることから中世の信仰対象と考えられる。なお『温古の乘』の片刈城についての記載のなかに次のような興味深い一文があるので参考までにあげておきたい。

「カタガリ山中に其遺骸（森道佐門之助充矩一筆者註）を埋しと云る一基の塚あり。」

（石沢 寅二）

8. 薬師堂の塚（図版VI一下）

本塚は長岡市宮本東方町字中山1370番地に所在し、後述する〈薬師堂跡〉の裏にみられる土壘状遺構の北端に位置している。塚は円形プランの土饅頭状を呈す〈円形塚〉で、封土はボーリング調査によれば黒色土によって構成されている。その規模は底径2m、高さ40cmを計り、塚としてはきわめて小さなもである。墳頂部には人頭大よりやや大きい自然石が認められるが（図版VIの下）、銘文・墨書等はみられない。したがって、石は必ずしも塚に伴なうものかは疑問な点もあるが、本塚付近にはこの大きさの礫を出す地層はない。したがって持ち込の石とも解され塚に関連性を持たせる可能性を十分にもっている。

本塚は築造目的やその時代を明らかにすることはできないが、〈薬師堂跡〉の削平地に接続する土壘状遺構の一部を構成することから、薬師堂建立期やそれとの関係において思考されないでもないが、主嶺から西に伸びた舌状丘陵の先端近くの傾斜崖線上にあることは、〈中山5号塚〉や〈座禅塚〉と塚の立地が似ており〈薬師堂〉建立以前に造営され、本塚1基で意味をもっているかも知れない。本塚の脇を通る登道は、道幅もあり、熊之宮の集落から黒川を渡り、本塚の脇を抜けて大菩薩に至り、さらに笹川から高頭・深沢方面にゆく街道として古くからの使用が考えられているので、本塚はこの街道に関連する可能性も考えられる。

（金子 拓男）

9. 薬師堂跡

長岡市宮本東方町字中山1370番地に堂跡は所在する。ヨ外ヶ入沢と小谷沢とに挟まれ、大菩薩から北西に伸びる舌状丘陵先端の西向斜面の中間部にあり、標高約90m、黒川の沖積地から約50mの比高がある。

堂跡は東側を弦とする半円形状を呈する削平平坦地で、約200m²程の面積を有する。現地は雑木が繁茂して十分な

探索はできなかったが、礎石や遺物は確認されなかった。

この平坦地について地元では〈薬師堂〉と呼称し、かつて薬師様があったと伝承を残す。その縁起等についての語りはない。また建物の存在を記憶している古老もないことから明治以前に廃絶した可能性が強い。削平地の面積からして三間二面堂程度の小堂が建立していたとも推定される。この地が西に広げ、中世〈大積保〉であった大積町を遠望し、眼下に黒川谷を見おろす位置にあることは〈薬師堂〉の性格を示唆するものかも知れない。（金子 拓男）

10. 中山1号塚（図版Ⅶ）

所在地 宮本東方町中山1723-1番地

本塚は宮本東方町字中村側斜面と篠川の沢通称大林側斜面との会する分水嶺上、通称四十刈分にあり、稜線にそって南北に通ずる林道の東側に位置する。この林道東側大林に落下する鞍部を削平して造成した広場、約150m²が範囲と考えられる。基壇は特に版築したとは認められないが、北斜面は杉林造成のため切り下げられて1~1.7mの段差を示す。東側は0.5mの段差をもって切り下げられ、一見基壇状をなす。南部は急斜面をなし深い谷につづき、西側は地均しされて約150m²の広場となり、俗に踊り場を形成する。一帯は雑木林にて、塚上の桜樹1本を中心に椿樹が粗生し、推定樹令30年である。周辺及び斜面には推定樹令70~80年の椿、楓、桜の類が自生している。

本塚の形態は土鏡頭形を呈する〈円形塚〉で、基底径東西、南北ともに5.5m、塚高1.0mである。遺物も無く、時代は不明である。（安達 吉治）

11. 中山2号塚（図版Ⅷ）

所在地 宮本東方町中山1724番地

本塚は1号塚の南方80m、稜線にそむく林道の西側雑木林中にあり、標高115m地点である。棱上の平坦部を若干削平し約120m²の広場をもつ。この踊り場はきわめて緩かな傾斜をなして北にのび、1号塚前に至る。本塚の形態は、一边約5mの方形塚で塚高0.7mである。塚上は柴木に被われ、周辺には樹令30年位の椿樹が自生している。外辺は50~70年の杉林となる。時代は不明であるが1号塚と同期のものと推定される。

1号塚及び2号塚について、人工的に土を盛り周辺を整備して広場も造ったことは確認できたが、築造の目的・性格等についてはまったく不明であり、村人の関心からも既に遠くなっているので、①郷村の境界を示すものか、②信仰上のものか、③墳墓か、④封建期の軍事的なものか、固より不明である。里人の言によれば、昭和初年まで〈ソーゼンバ〉と称して使用されていたとのことである。即ち馬の〈修繕場〉のことである。軍役、農耕、輸送機關としてまたは厩肥の供給源として、村落には多くの馬が飼育されていた。この馬を手入れすることを〈馬修繕〉あるいは、〈馬コシラエ〉と称し、伯楽を招きこれが指導のもとで若者達が共同作業をした。終了後は酒食を持ちより、馬の健康を祈念し、慰労宴を盛大に催したという。塚を中心広場はこのようにして使用されていたが、牛が馬にとってかわり、やがて機械化の進む中で前述の行事も消滅し、塚の使用も終息して今日に至ったのである。（安達 吉治）

12・13 中山3号塚（図版Ⅸ）・4号塚（図版Ⅹ）

所在地 宮本東方町中山1474番地

両塚は中村の山頂にある。宮本東方町は、北は曾地丘陵がせまり、南は長岡市、三島郡越路町に連なる八石丘陵であり、この間を流れる黒川はここで蛇行し平地部の閑原に向って流れているが、黒川の狭間的細い沖積地に依って開けた町である。始め篠川の沢に村落（篠郷）がおこり、黒川の治水により追々現在地に移ったと言われている。黒川は昔は宮本川と称されていた。中村の東方駐在所付近より中山林道を登ると右手に畠があり、このあたりを〈滝坂〉

と称し、左手に寺院跡と言われるところがある。少し登ると、頂上になり、さらに南の通称〈大菩薩〉へ向って歩くといま一本の林道との分岐点がある。この林道は中村に連なっているが中村の方へ少し行くと傍の松・雑木林の中に南北に並んだ2基の塚がある。里人は〈ふた塚〉と呼んでいる。北側を3号塚、南側を4号塚と呼称することにした。2基とも松を植林する際に西側半分を壊されているが、ほぼ同じ大きさで径6m、高さ0.9mの〈円形塚〉である。

土地の人はただ〈ふた塚〉と呼ぶのみで何の伝承もなく、また時代を推定できるような遺物もないが、ここに登る途中の寺院跡や笛川にあったと言われている寺院跡（19の寺屋敷遺跡）と何らかの関係があったのではないかと考えられる。

（山崎 弘作）

14. 中山5号塚（三ツ又の塚）（図版VII）

長岡市宮本東方町字中山1861-1番地に所在する。東方の丘陵線上の大菩薩から東側笛川谷に向って伸びた舌状丘陵最先端部に位置し、水田からの比高は約5mである（図版VII-1中）。塚は円形プランで土饅頭形を呈す〈円形塚〉で、基底部直径12.4m、高さ3m、西側にはU字状の断面をもつ周溝がめぐる。周溝は天端幅で4.5m、深さ1.2mを計り規模は大きい。塚頂部には直径約60cmの杉の古木が残り、その年輪は100年前後を示すものと推定される。封土はボーリングにより確認する限りにおいては黒色土を主に構築されている。

塚の北側は5m程の崖に接し、崖下には水田がある。東側は約100m程の面積をもつ人工削平により東に頂点をもつ三角形状の平坦地がある。南側は周溝底から1.2m、東側平坦地から約80mの低さで平坦地があり、約200m程の面積がある。塚の東・南側に位置する削平平坦地が塚に伴なう遺構であるか否かは地表面からの観察のみでは決断し得ない。また從来塚の周辺に平坦な地域を備えている例は報告されてはいない。しかし、塚の調査では、塚そのものを対象とし、その周辺部に配慮してこなかったことも事実であり、塚周辺部の調査は今後の課題としなければならない。本塚の削平地は、〈蛇山10号塚〉のごとき山頂部に位置し、その周囲がきわめて平らになっていてことと共通性がみられ、塚の盛土を求める跡とも祭場とも考えられる点のあることを指摘したい。今後塚とその周辺部関係すなわち、塚の盛土の採集地・塚に伴なう祭礼行事・塚に伴なう施設等について究明する必要がある。

本塚は今度の調査区域内において発見された塚のなかでは沖積地と最も比高の少ないところに位置している。また塚の規模は最大で他とは比較にならぬ程大きい。これらのことが本塚の構築目的やその年代を表すものかは定かではないが、顕著な特徴としてあげることができる。この付近が〈三ツ又〉と呼称されることは、〈三ツ又〉が道路の三叉路を意味しているものと推定されるので、あるいは道路の表示や交通に伴なう信仰形態を具象化したものとも理解される一面をもっている。いずれにしてもその性格追求は、塚の周辺部を含めた発掘調査を実施することによりある程度の把握が可能と考えられ、今後の塚調査に期待したい。

（金子 拓男）

15. 中山6号塚（北河内の塚）

長岡市宮本東方町字中山1588番地にある。この地は東方神社（旧剣社）の北側の沢〈北河内の沢〉を登り詰めた尾根上で、嶺線がある程度の幅をもって平坦につづき、急に傾斜を増すがその傾斜直上に位置する。ここは東方丘陵の先端に近く、稻場部落から登ると3段目の平坦尾根にあたり、塚周辺は南北に長い比較的大きな平坦地となっている。

塚は東西7m、南北7m、高さ約70cmで、塚上が広く平らに造られており、塚といより基壇に近い形態を呈している。ボーリング調査によれば、盛土は黒色土で容易に刺すことができる所以盛土はやわらかい。したがって版築の可能性はきわめて薄い。塚の主軸は南北方向にはば一致しており、基壇状の形態とともに本塚の特徴のひとつである。構築年代や性格は今後の調査にゆずりたい。

（金子 拓男）

16. 丸山城跡(第8図)

長岡市宮本東方町字中山1543・1544番地に所在する。この辺は地元で、通称〈丸山〉と呼称するところである。

城跡は東方丘陵のほぼ中央部、主丘陵軸が西に張り出す支嶺線の西側斜面を、すなわち黒川の沖積地に向って構築されている。場所は、宮本東方町の中村から東に向い、尾根の坂道を登り、大菩薩にゆく道があるが、尾根に達する手前の左側にあり、東方丘陵の嶺線を縦貫する尾根道の西側、一段高い場所に位置している。

城跡の縄張は第8図のごとくで、1が主郭と思われる台形状を呈す郭で標高130mある。その北側には約50m下って2があるが、北東に傾斜をもつ。3は細長く、幅10m程度で東側2に接する部分では基底部1.5m高さ40cm長さ15m程度の土壘状の遺構がみられる。これらの郭群の東側は30°～40°の傾斜をもち、高さ5m～7mの崖状のものとなつておらず、明らかに人工によるものと判断される。西側は4・5の平坦地が認められる他は自然の傾斜のまま6に至る。6は郭というよりも土壘的なものであり、北側は約9mの崖となっている。6と5の間には、堀状の凹地があるが、滝坂の沢に向って口が開いており、本来の滝坂沢の始源と考えられる。7・8は土壘状のもので郭ではない。9は郭状の遺構を示し、平坦で8より約1m高いが、北側は意識的区画は認められず、自然傾斜へと続く。9と8、8と7との間隔は天端幅約9～10mあり、断面U字状の堀切となっている。7と6の間は、滝坂沢を延長した状態の堀で、堀から6へは6m程の崖がある。これらの堀は尾根線を断つことなく造作されており、人工的意識的造作である。この他、10と11の郭と考えられる平坦地がある。

本城跡は、城跡とみるには不適当な一面をもっている。すなわち、1・2・3の主郭に相当する部分の造作が粗雑で、きれいな整地がみられず、地形の傾斜がそのまま残っており、通常の認識からすれば郭と呼ぶにはふさわしくない。加えて東側揚手に相当する面が防禦が十分ではなく、尾根を切断する空堀がみられず、崖状をなす防禦面のみである点である。

また主郭を9においた場合は、6から9は3m程の高低があり、9から6は一望される弱点がある。しかし、6と7との間にはきりたった崖と滝坂沢へと続く空堀があり、7と8、8と9の間にはそれぞれ堀切によって一応連絡が断たれてはいる。また10の北側は深い滝坂沢があり、西側にも浅いが幅10mを越える箱堀風の沢（本沢は、植林時か否かの判断は別としても両側は約1.5mの高さをもち、約40度の傾斜をもつ法面となっており、沢底は平坦であって明らかに人工的なものとなっている）で固めている。また10・11は比較的広い面積をもつ平坦面であるが、特に11については起伏がみられ、造作がおこなわれたと考えられない一面をもっている。

このような未定の形態をなす城郭は、本調査で発見された後述の〈鷹射山城〉でも同様であり、この地のある時期の歴史的様相を示しているのかも知れない。いずれにしても本跡は城郭と推定されるが確証がなく、今後の調査によって遺構調査を十分にやり、その上に立って検討せねばならないと考えられる。

なお、本跡の主郭と推定される1から南へ続く尾根に中山3



第8図 丸山城跡略測図

号・同4号の二基の塚がみられ、〈双子塚〉と呼称されている。本跡とあるいは関係を有するものかも知れない。

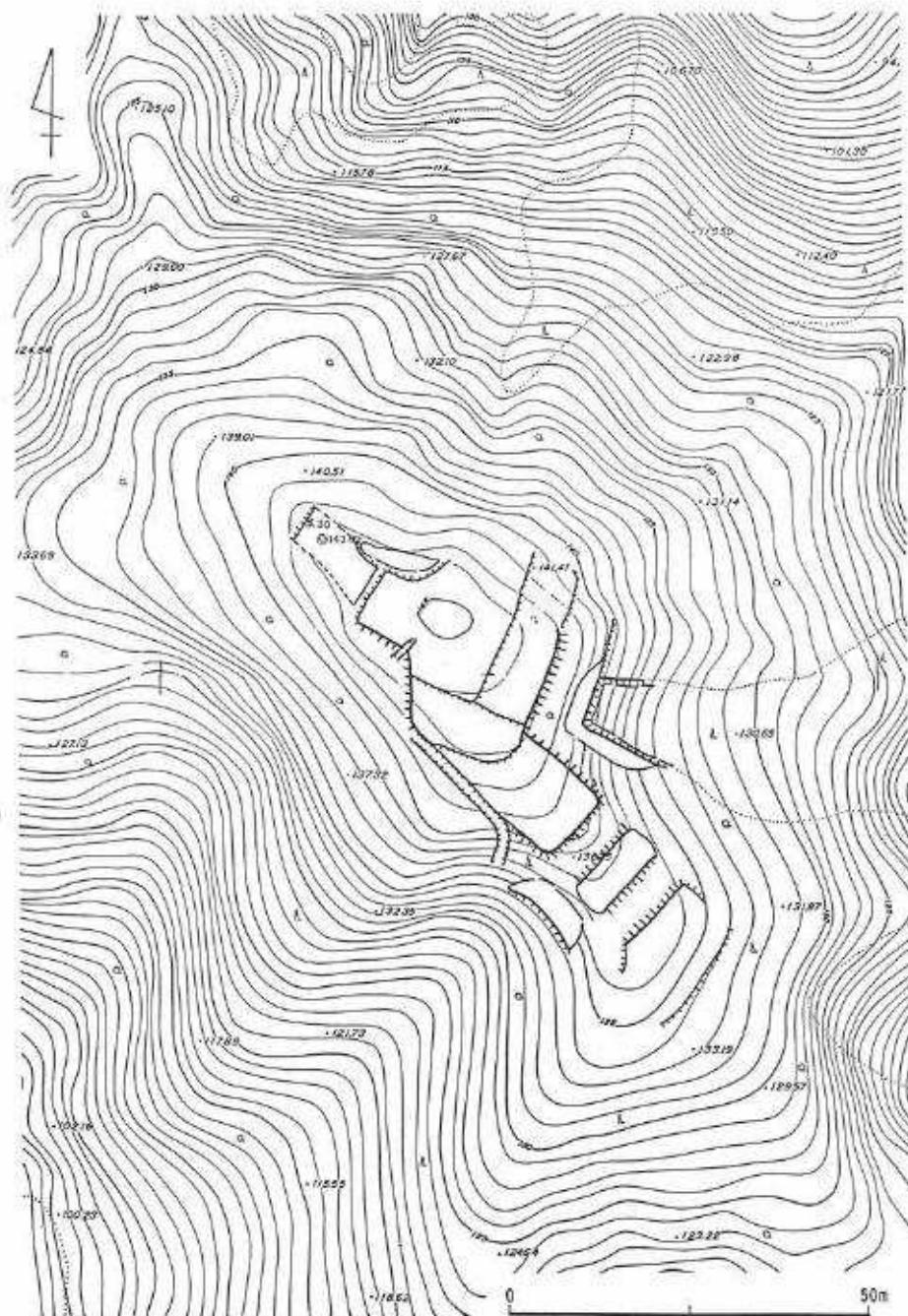
(金子 拓男)

17. 鷹射山城跡(第9図、国版図)

大積町1丁目郷ヶ田甲425・478—3, 山本甲1121・1126・1127に所在する中世城砦跡である。

鷹射山城跡は、その西側の大積一宮本東方に沿う丘陵の一つの支脈の突端にある。西山連峯と関原丘陵の間には、黒川谷が深く入りこんで、その最奥地には曾地峠があって、長岡と柏崎の境界点となっている。この黒川谷には現在国道8号線が走り、古くから交通要路とされていた。

鷹射山は、黒川谷を分断するかのように黒川の谷に押し出した、一見、独立山塊状の山である。遠望する限り、丸



第9図 鷹射山城跡略測図

味のある姿態と見られるものの（図版Ⅺ一上），山頂に登ってみると，山の頂部はなだらかだが，周囲がきびしい急斜面なのに驚く。

山頂（145m）は，比較的緩く北西に傾く平坦面で，東南はやや急斜で東方山系との間の鞍部はくびれている。中心郭は7aほどもある（第9図）。その南東郭壁の高さは1mほどで，やや降って30m程の長さの浅い横堀を掘り，さらに降った所に，幅5m深さ70cmくらいの二重堀切がある（図版Ⅺ一下）。なお50mほど尾根を下るあたりにも浅い堀切がある。これらの堀の両側斜面は明らかに削り出されたもので，法面は急である（図版Ⅺ一中）。さらに馬の背のような尾根の道の横に，かくれ穴のような掘り凹みのあるのに気付く。中心郭の北西には，長方形の郭跡がいくつかあって，その間には浅い空堀もある。なお中心郭の北側に屈曲した長い横堀状の溝があるが，全体として古風な構えである。

中心郭の北側の緩斜面と，それより東方に下った沢地には，郭跡がいくつか認められ，また，この沢の堤口にも，根小屋の跡らしい段々の削平地がある。いずれも郭のめぐりの崖壁は低いものである。

足利将軍家の執事上杉憲顕が関東管領になると，その子を越後守護に任じ，東国日本海側のおさえとした。鷹射山城，片刈城，灰下城（楔形城とも言い鷹射山城の西南奥地4kmにある）は，上杉氏被官の甘糟氏が所領として，越後中・下郡への最前線の門戸守備に当っていた。但し御館の乱時代には森氏（毛利）らしいが……黒川が彎曲して鷹射山城北西麓の台地を囲む自然の防禦陣地を利用して星形（未調査）を築き，越後守護府をめざす，中下郡の武将の軍団の動向を看取する望楼を鷹射山上に築き，合戦となれば山上にたてこもり，本城の楔形城・岩野城その他周辺の城砦と呼応して，この谷で敵をせん滅するのが，この山城の経始と解釈できる。鷹射山城が城らしい堅固さを欠くのも，そのためであろう。要するに対敵哨戒と包囲作戦の為の城砦配置網上の一城砦とみるべきである。

鷹射山城の郭壁が低く，二重式空堀や浅い横堀などの構えを考察すると，南北朝時代の小軍団騎馬戦時代の構えに近似している。片刈城にもそうした傾向がみられるが，本城の最有力候補である灰下城（大積）やその周辺の実態を把握・比較検討しなければ明確な答えを出すことはできない。

本城跡については，古記録も伝説も，今のところわからない。今後の調査にまつべきものは，居館跡を探索して，土中の陶器等によって時代判定を行うよりほかに名手がないように考える。

（室岡 博）

18. 片刈城跡（第10図，図版Ⅺ，Ⅻ）

高頭町大山甲532・533・546・571番地他に所在する，中世の山城跡である。

関原丘陵は，標高200m前後の山嶺の連なる複雑な地勢であるが，特に北東部は三叉状となり，平行しつつ3kmも連なっている。東側の丘陵は，高寺部落と高寺城のある丘陵，中央連山は高頭（旧牛ヶ首）部落と片刈城のある丘陵，西側に笹川谷をはさんで大積・宮本東方部落と鷹射山城のある丘陵が，自然の要塞そのもののようなたたずまいでの，その三連山の結びつく主峯は片刈城の一部とみなされる大山（鏡山1212m）である。

三つに分れた丘陵の中央山なみの南端に三角錐状の峯があって（図版Ⅺ一上），その頂部を20m×15mほどの矩形に削平，狼煙場（？）を構え，北東には土壘が認められる（図版Ⅺ一下）。この主郭からは西に向って遠望がきき，小木ノ城や二田城（図版Ⅺ一下）および鷹射山城を望むことができる。この主郭から下方10mほどの所に，東・南・西の三方に帯郭をまわし（図版Ⅺ一上・中），城郭がつながる三筋の尾根上を〈薬研堀〉で断ち切っている（図版Ⅺ一下，図版Ⅺ一上・中）。主郭の東南斜面は，やや緩く，季節風の風下でもあり，飲料水も得られる地形でもあって，数ヶ所に郭跡らしい平坦がみられる。西南尾根に細長い郭跡の連なる所は，追手や搦手の道の合流する要所にも郭跡らしいものがみられる。

片刈城頂から北東へ約500m，三本俣の槍のような三山系の根じめに当る最高峯の大山（鏡山）は，こんもりとし

た山で、片刈山のようなきびしさはないが、崖壁の低い郭跡数段が藪かけに認められ、城郭の可能性をもつところである。大山と片刈城の間に〈城ノ沢〉という水量豊富な水田の多い沢が深々と二つの山の間に食いこんでいる。大山側の裾をたどると何ヶ所か横堀や土塁をめぐらした陣地らしい郭跡がある。ほかに片刈城の北西高頭沢に面した山裾に幾すじかの尾根が下降し、山裾には小沢が食いこんでいる。〈城ノ沢〉と〈まあぎ平〉の間の尾根と、次の根 小屋らしい多くの郭跡のある〈やしき田〉との間にある尾根には、先端に古い道と木戸らしい構えがあり、尾根伝いに数ヶ所、横堀をめぐらす方形郭跡がある。殊に中腹には深い切り通しを抜けて片刈城西南郭跡に取りつく軍路らしい幅3mほどの古道が目についた。

片刈城の周辺には城にまつわる次のような伝説がある。(1)喜与右エ門谷は最も奥まった所で、大山の真下だが現在



第10図 片刈城跡略測図

高頭部落の旧家高木隆義家の祖先が、片刈城落城のおりにこの沢にかくれ住み、後に高頭（牛ヶ首）に出。さらに江戸時代には関原に出て開拓し、関原町の元祖となったと伝えられている。(2)高頭部落から片刈城の下まで続く1km以上もある通称〈かくれ谷〉は、迷路のように片刈城壁にのびており、その最奥地に落城の際、城主の姫をかくしたといわれている。現在、ここには10haほどの削平地が3ヶ所ほどある。(3)反対側の笠川谷に片刈城の西南数百メートルの地点から分岐して下降する山塊は、その昔、寺があったという〈寺山〉、〈城山〉と呼ぶ急崖に閉まれた郭跡などがあり、いたる所に削平地や土塁が残っている。かつて宮本東方町はここにあったと言われている。宮本部落からの山道が山麓にとりつく所に屋形らしい遺構があり、地元では〈城〉と呼んでいる。

片刈城の遺構は概して切崖が低く、堀切も横堀も浅く、戦国最盛時の構築ではなく、もっと古い時代のものらしい狼煙を使命の第一とする城郭であるが、同じ山なみの最高峯に築城した4km東南の樹形城(299m)の支城としての可能性が強い。

片刈城と高寺城・上除城・岩野城・深沢城背後の鷹射山城等につき、樹形城を含めて、主城・支城・出丸の関係がどのようなものであったかについて、越後古城記や地元の伝説とか越佐史料に照らして一考してみる必要がある。

越後古城記の片刈城の項には「城主は森家(森道)森道左門之助光矩、天正年中上杉家相続争い(謙信の養子景勝景虎)に景虎に味方し滅亡、遺骸を埋めた塚がある(後略)」越佐史料、上杉謙信伝には森氏の記事は見当らないが、片刈城の落城悲話を含め、その城郭的戦略的使命と歴史を探り、今後の調査に期したい。
(室岡 博)

19. 寺 屋 敷 遺 跡

本遺跡は、宮本東方町東山2438、2440番地に所在する寺院跡(?)であり、桐ノ木沢に源を発し、宮本東方町をほぼ南北に流れ、百度橋付近で黒川に合流する笠川の右岸に立地する。標高約95mを測り、東南には片刈城跡が望まれ、対岸の杉林には中山5号塚、尾根筋には5基の塚(中山1~4号塚、6号塚)が点在している。

遺跡は牛ヶ首からのびてくる尾根の中腹に位置し、現在は荒地となり雑木が繁っている。南北約50m、東西約30mの範囲が削平されて平地となっている。

聞き込みによれば、この地は広川源一郎氏の所有地で、野中氏が借地して耕作をおこなっていたが、須恵器片(?)らしき遺物が数点出土したといわれる。そのうちの1片を須田の寺の住職である渡辺高山氏が所有していたといいうが、その所在等の詳細は現在不明である。また今回の調査では遺物は採集されなかった。

以上のように本遺跡は寺院跡としての伝承等は残存しているが、それを想定させるような遺構、遺物はまったく確認されていない。
(寺崎 拓助)

20. 米 山 塔 21. 月 待 塔(図版XII)

長岡市に所在する多様の石塔は、長岡大手高等学校歴史クラブの組織的な調査により、宮本町周辺の石塔の所在地点及び種別も含めて、詳細な報告がなされている(長岡大手高等学校歴史クラブ編1973)。

ここに紹介する米山塔及び月待塔は今回の調査で発見された石塔であり、碑面に刻まれたタイトル及び立地など、類例の稀少の建碑の在り方を示すものであり、前記報告書の記載外のものである。

所在地 宮本東方町中山1425番地

宮本東方町の東側後背に迫る関原段丘は起伏の激しい山容を形成し、周辺に多岐の舌状台地を突出させ、山麓には水田や畠地が拓かれている。米山塔及び月待塔の所在する〈ブッコメシ〉舌状台地は東方町の南西に位置し、東流する黒川右岸に拓かれた水田付近から北西にのび、関原段丘をつなぐ緩やかな斜面の舌状台地である。両石塔の占地地点は、台地中腹の最も緩やかな斜面が選定され、尾根伝いに拓かれた山道の側面に立地する。立地地点からは、刈羽

・三島の両郡を縦走する曾地丘陵上に所在する小木ノ城をはじめ岩野城・鳥越城など、中世の山城が眺望され、景観は雄大である。

両石塔の安置点は、山道側面に北西軸約3m、高さ45cmを計る土壇が構築され、頂部の削平された長方形状の土壇であることが確認される。また土壇全層土の把握は確認できないが、石塔の据つけ点の下層は黒色を呈する厚い土層が観察される。この黒色土は自然堆積によるものか、盛土によるものか定かでない。土壇左端に朝勢のきわめて旺盛な松の大樹が生い、四方に枝をひろげており、遠くから両石塔の所在地点が判る。

著しく碑面タイトルの簡略化された石塔建碑のあり方を示す米山塔・月待塔は、台石も省略され、下塔身を土中に据え、碑面を東南に向けて安置されている。米山塔は土壇上の左側に安置され、頂部のやや尖る高さ40cmほどの花崗岩の自然石を用い、その中心部の上下にかけ「米山」と浅刻で記刻されている。月待塔は土壇上右側に安置され、高さ40cmほどの安山岩の自然石を用い、その中心部に薬研彫り状の下弦月を穿ち、左端下に「明治廿五 五十才」の記刻がある。なお両石塔には風化や損傷の痕跡は認められない。

月待塔の建碑年代は碑面に刻まれた明治25年であろう。米山塔には建碑年代の記刻はないが、簡略化された両石塔の碑面タイトルの共通点から想定して、米山塔も同年の建碑と考えられる。

旧4月8日は薬師の命日であり、米山では盛大に祭事が営まる。またこの日は月の半弦に当ると謂う。旧10月8日にも秋祭が行われ、旧7月26日には月待祭の行事があった。宮本町の周辺地域は、かつて三夜講の盛行地域であり、各種の講活動が盛行した時代にはこの米山塔・月待塔の塔前に祭事が営まれたであろうが、両石塔の周辺に祭禮遺物やその他の遺物も発見されていない。

米山講や月待講の盛行はさして古い時代のことではない。各種の講の盛行年代と大差はなく近世に入ってからである。このことは前記報告書に集録された米山塔の建碑年代からも明らかである。米山塔建碑のピークは明治年間であり、この時代の建碑は実に42基を数える。この米山塔も月待塔も最盛期の所産である。米山塔の初期の碑面タイトルは「米山薬師如来」、「梵字（ペイ）・米山薬師如来」、「米山薬師塔」、「米山薬師供養塔」など文字数の多いタイトルがみられ、盛行期の明治年間に入ると「米山塔」と記刻される簡略化が顕著となる。また建立者名は「講中」、「願主」、「同行」、「村人」などが多く、個人名や無記名のものもあるが、この米山塔のように常に「米山」と刻む事例はない。また立地地点は村はずれの路傍、社寺の境内、個人の宅地内などが多く、稀れではあるが米山の見える山頂や高い所に所在する例もある。

月待講は二十日講、二十二夜講、二十三夜講、二十六夜講などが知られているが、月待塔の碑面タイトルは講の月名をそのまま刻むのが通例である。したがって下弦月を刻む月待塔は事例も少なく稀れであろう。

以上、通例の米山塔及び月待塔の一般的なあり方をみてきたが、ブッコメン台地に所在する両石塔は立地及び碑面のタイトルのあり方も異なる。したがってこの両石塔は、米山講の盛行期である明治25年、当時50才の米山薬師や三夜様を信仰する個人により、米山を遙拝できるブッコメン台地が選定され、山中に搬入するに適当な自然石を選び、自ら碑面のタイトルを刻んだことが、碑面タイトルの省略と技法の稚拙さから想定される。その意味で当時の米山信仰の侧面を知る貴重な石塔であろう。

(山口 栄一)

22. 地 藏 尊(図版XIII-2)

中山1～4号塚が点在する丘陵の尾根すじを走る山道の、通称大菩薩の路傍にある。像高50cm、安山岩製で右手に錫杖、左手に宝珠をもっている。全体的に彫りは浅く、目鼻は不明瞭で首部に修復の痕跡が認められる。蓮台は幅35cm、奥行20cm、厚さ10cmで、簡略化された蓮弁が陽刻されている。

(千葉 英一)

23. 地 藏 尊 (図版)III-3)

高頭町の谷川に面した小支谷（通称小入の沢）の沢口の路傍にある。像高28cm、安山岩製で手を合掌させている。蓮台はないが、当初はあったものと思われる。大菩薩の地蔵尊とともにその製作年代は不明である。

(千葉 英一)

〔引 用 参 考 文 献〕

地域振興整備公団 (1975)『長岡ニュータウン建設事業にかかる環境(植生・動物)および文化財調査報告書』

金子拓男・駒形敏朗 (1976)「蛇山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第6』pp.27~44

金子拓男・和田寿久 (1976)「地蔵塚」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第6』pp.45~60

経済企画庁総合開発局国土調査課編 (1968)『土地分類基本調査 長岡5万分の1』

長岡大手高等学校歴史クラブ編 (1973)『長岡市における石塔の分布とその種類』古志の石塔I

中村孝三郎 (1966)『先史時代と長岡』長岡市立科学博物館研究調査報告第8冊

新潟県教育委員会 (1967)『新潟県遺跡目録』新潟県文化財年報第七

(1975)『新潟県遺跡地図』

温古談話会 (1891)「牛ヶ頸の古城跡」『温古の集』第17篇 p.15



第11図 遺跡位置図 (図中の番号は本文中の遺跡番号と同じ)

図版 1



岩野城跡

図版 II



岩野城跡

図版 III



全景（東から）



全景（南から）



西側斜面

座 禅 墓

図版 IV





遠景（北から）



平坦部



西側斜面

城扣遺跡

図版 VI



蛇山7号塚



蛇山10号塚



薬師堂の塚

図版 VII



中山1号塚



中山2号塚



中山3号塚

図版 VIII



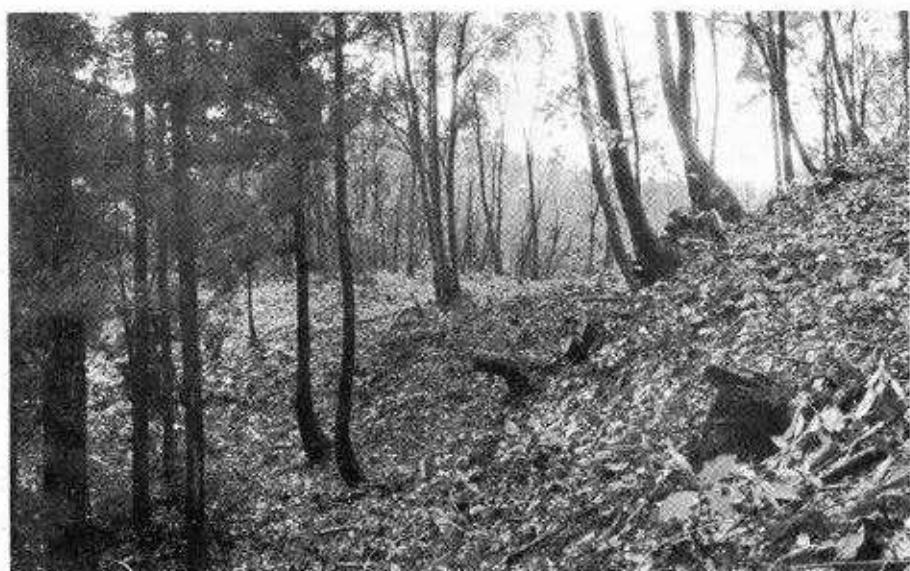
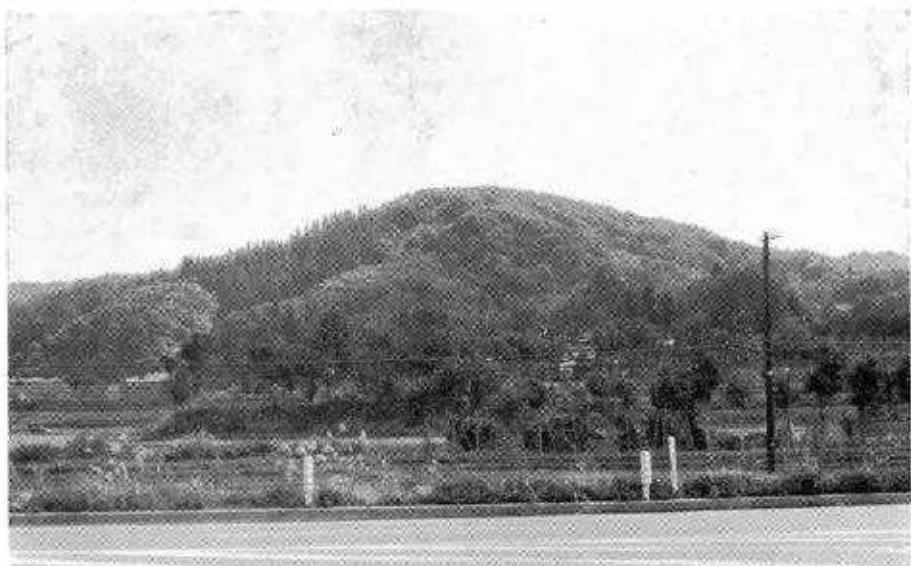
中山4号塚



中山5号塚
(杉林の中)

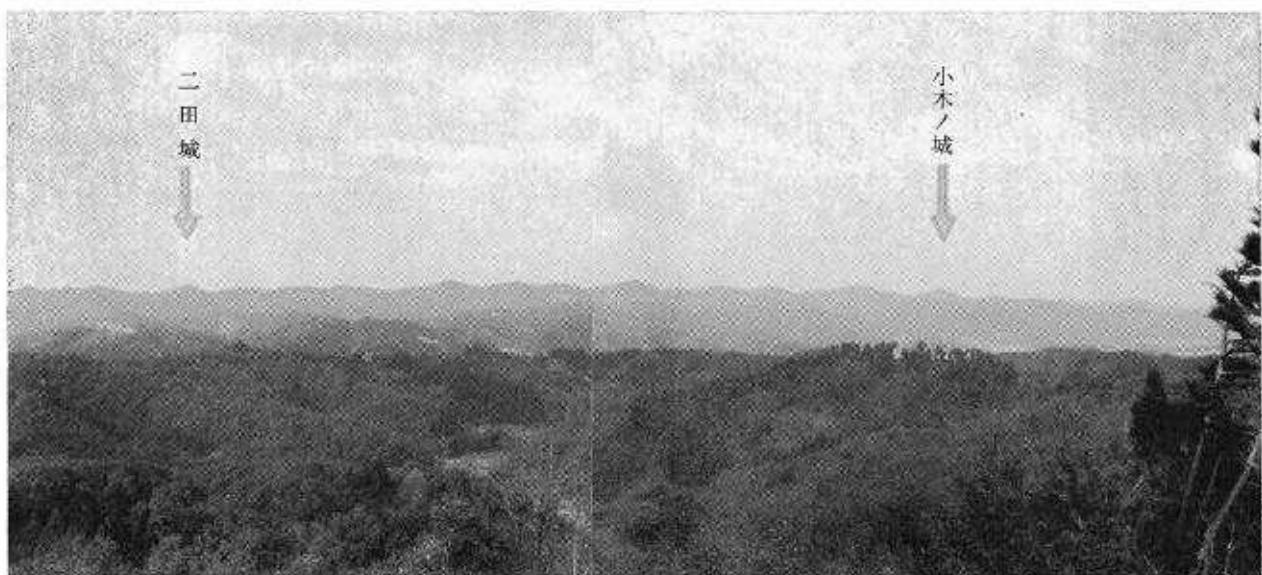


中山5号塚



鷹射山城跡

図 版 X

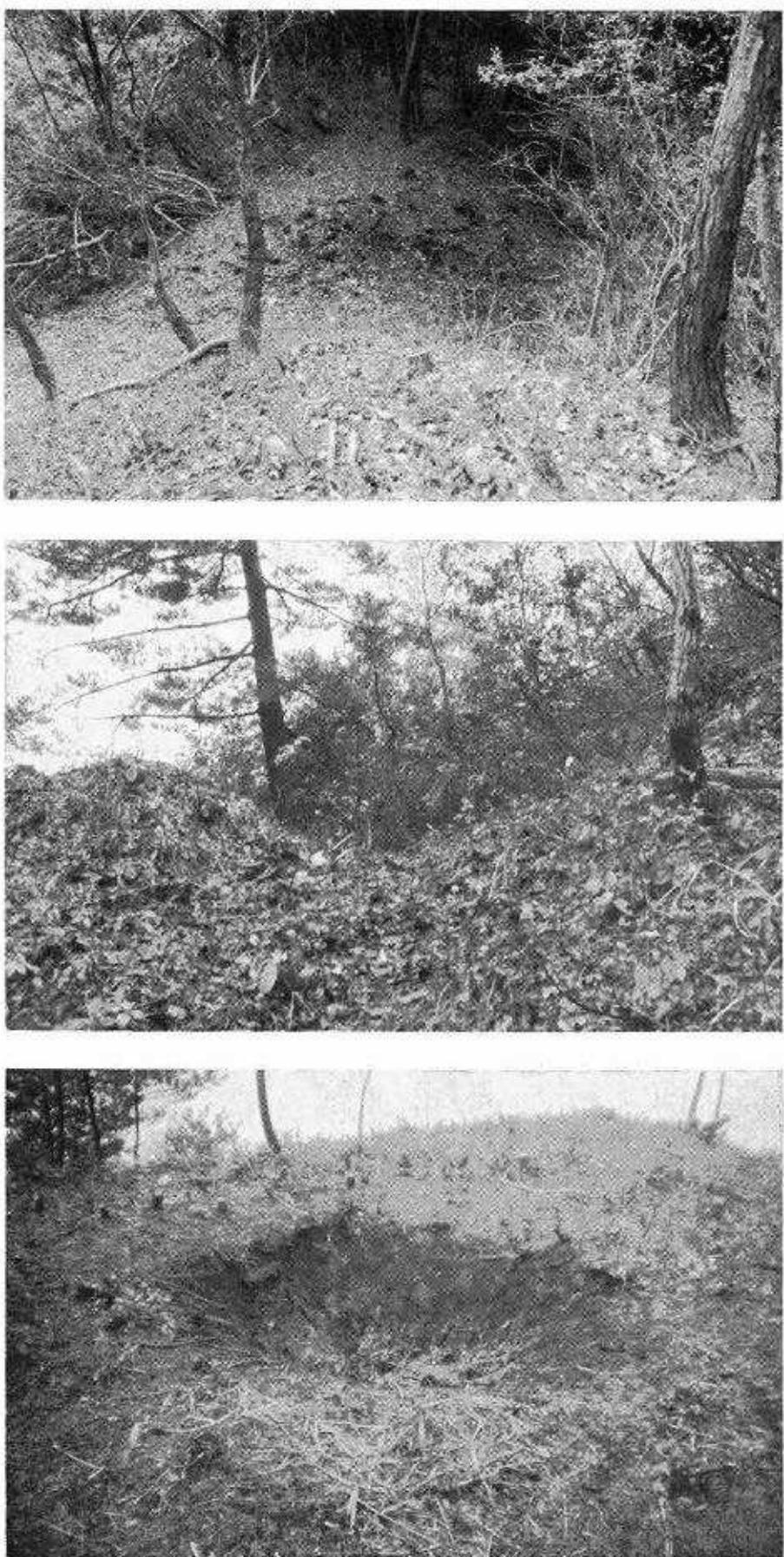


片 剣 城 跡



片刈城跡

圖 版 XII



片 刘 城 跡



1 (左) 米山塔、(右) 月待塔

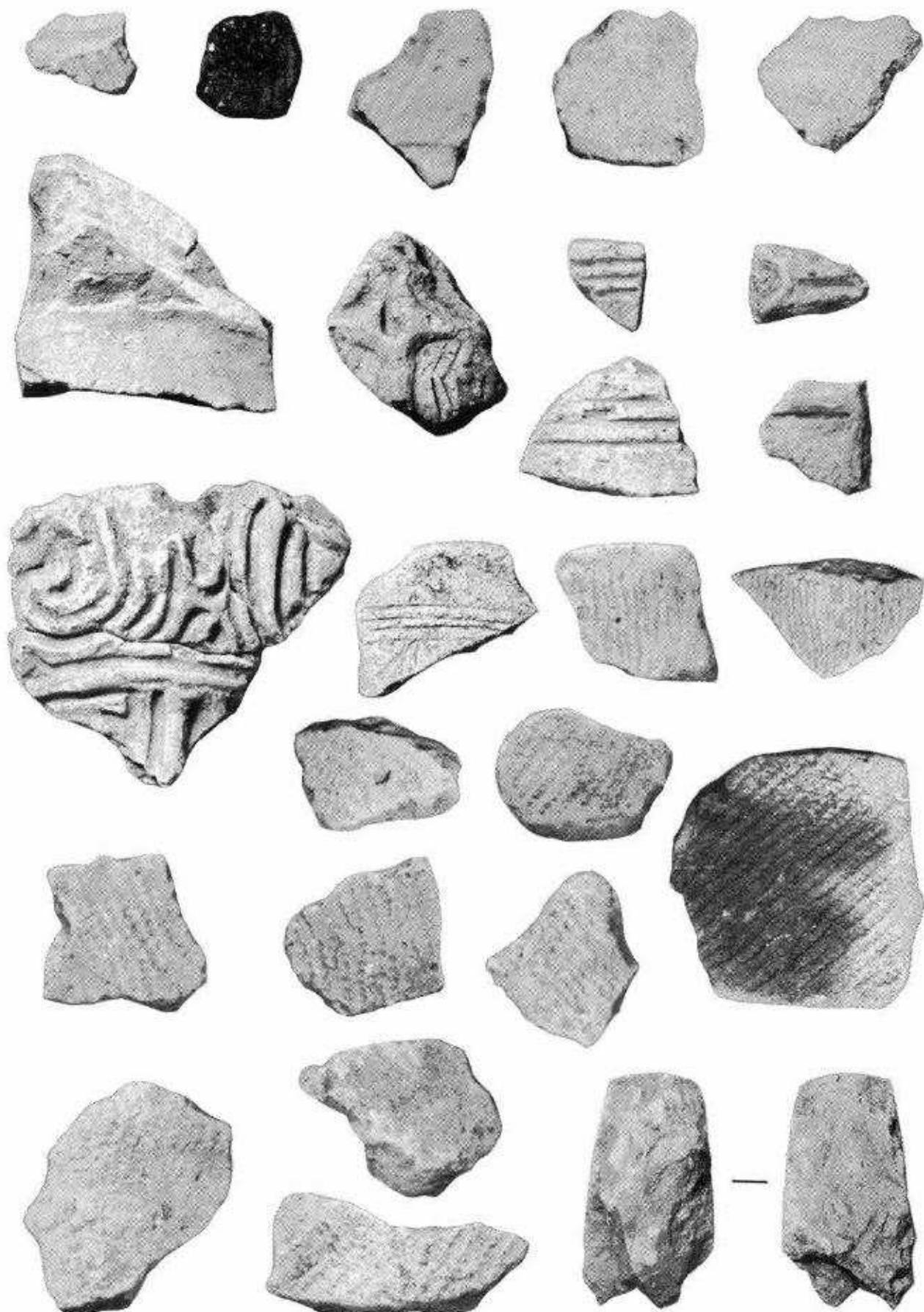


2 地藏尊



3 地藏尊

図版 XV



採集資料 (最上段は觀音山遺跡、他は城扣遺跡)

新潟県埋蔵文化財調査報告書第10

長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書

[I]

昭和52年3月20日印刷

昭和52年3月25日発行

発行 新潟県教育委員会
印刷 北越印刷株式会社